

発刊によせて

儒家の思想は、紀元前六世紀頃、孔子が確立し、孟子や荀子等が発展させた。やがて古代の中国で思想界の中心を占めるに至ったが、これがアジア各国に広がり、一つの世界精神にまでなったのは、何と言っても朱子学の功績に負うところが大きい。

朱子学を唱え入れた朱子（朱熹）は、十二世紀の宋代に活躍した儒者である。儒学の体系化を試み、道教や仏教の思想を積極的に取り入れた。すなわち、世界や人間を仏教的な「理」と道教的な「氣」の二元論で統一的に説明しようとした。「理」は禪仏教を経由した華厳思想から、「氣」は道教の宇宙生成論から、とりわけ大きな影響を受けているという。朱子は、仏教に対しても道教に対しても手厳しい批判を加えた。論敵を叩きながら、敵の論理を換骨奪胎して自分の中に取り込んだわけである。「賢者は敵から多くを学ぶ」という古い格言があるが、それを地で行ったのが朱子である。朱子学の登場によって、儒学は時代や文化を超えた世界性を獲得した。普遍的な原理に基づいて個人、家族、国家、宇宙を統一的に説明し、そこから道徳と統治の理念を導き出す。朱子学の壮大かつ現実的な構想は、時代と国を越える確かなエネルギーを秘めていた。だから、それは朝鮮半島や日本などの東アジア地域に定着し、今日にみられる儒教の一大文化圏を形成した。朱子学は一種の創作儒教と言える。しかし、この創作なくしては孔子の世界化もなかった。やはり朱子こそが、孔子の重要な後継者なのである。

翻って、現代の儒学者には孔子の思想をさらに世界化する責務がある。急速なグローバル化の中、もはや儒学文化が東アジアの世界に安住することは許されない。これからは西欧や中東、アフリカ等の思想とも融合した、真に世界的な儒学思想を追求すべき時代である。

そうした観点から、当研究所でも、世界の優れた諸思想と孔子の思想を比較考察し、新しい儒学のあり方を模索したいと考えている。ここで必要になるのは、新たな統合軸の思想である。私は、それを、東アジア的な色彩が濃い儒学そのものではなく、大乘仏教の經典『法華経』に求めたい。

朱子学も統合軸の一つに禅関係の仏教を置いたが、禪は仏教の一つの立場を代表するにすぎない。これに対し、『法華経』には仏のすべての教を統一する思想性（一仏乗）がある。また、あらゆる現象（諸法）を究極の真理（実相）とみなすから、その統合力は仏教以外の思想性・哲学・宗教にも及ぶ。グローバルな新儒学を展望する者にとって、『法華経』の持つ無限の統合力ほど魅力的なものはない。

もし『法華経儒学』が成立したら、いかなる思想世界が現われてくるだろうか。聖人の道から人間の道へ、無欲から活欲へ、道徳から智慧へ、理気説から生命論へ――恐らく、そのように人間的で自由闊達な儒学が生まれるのではない。そう夢想しつつ、本誌『研究東洋』の一層の充実・発展を願うものである。

平成二十七年二月吉日

東日本国際大学
東洋思想研究所長

松 岡 幹 夫